

カルチャー・ショック

外国人のみた日本



Arup Mitra
出身地：インド・デリー
所属：デリー大学経済成長研究所教授
日本滞在：2005年10月～2006年5月

初来日

アルプ・ミトラ

成田空港でバスに乗り、午前七時三〇分頃にホテルに着いた。不安と興奮で頭の中はいっぱいであったが、アジ研に連れて行ってくれるカウンターパートが来るのをラウンジで待っていた。「英語を話さない人々が住む国で、どうやって生きていけるのか。日本語の文字は全く分からない。食料品などをいかにして買えるのだろうか」。フロントデスク付近のウェイターは私の表情をみたのか、哀れんで私のところに来て出身を尋ねた。私がインド出身だと知るとその彼は喜んで見えたが、七カ月の滞在を知ったとたん、顔が青白くなった。「えっ、七カ月も！」と彼は驚嘆した。そのため私の不安は増した。暫くしてカウンターパートが到着し、私に英語で話しかけてくれたため、心が和んだ。研究所で他の方にも会い、緊張状態は徐々に和らいでいった。

翌日私は慕張駅を超えたところのアパートに移った。案内してくれたカウンターパートが去ると、目の前の墓地の暗闇から出現する恐ろしいものの姿を想像し始めた。手前のドアを急いで施錠したが、部屋全体がマッパチ箱のように感じられた。「七カ月もの間、どうやって生活すれば良いのか」と自問した。私は子供の頃を思い出した。寝室で姉と陣地を争った際、「もう、困った子供ね。日本ではどのくらいの広さで生活しなければならぬのか知ってる？」と母は叱ったものだ。だがすぐに、(墓地と書いた) その場所がそうではないことを知り、恐怖心は消えた。記念碑だったのだ。さらにその次の日、私は食料品を買いに行くことにした。塩(ソルト)が見つからなかったため、店員の一人に助けを求めた。ソースを探していると思われ、様々なサイズの瓶があるところに案内された。その後苦労したが、塩があると思われる場所を自分で見つけた。だが、一袋取り上げたものは、冷静に考えても「塩ではない！」と思えた。そこで満面の笑みを浮かべ、中年女性客に尋ねたが、それは砂糖で塩は別の棚にあることを熱心に指摘してくれた。翌日ミルクを買いに行った。見渡したが売場が見つからなかったため、店員に再び助けを求めた。だが、ミニント売場に案内された。そのことにより、問題は彼の理解力ではなく、私の発音にあったことを確信した。

私が慌ててコートを着ようとしたため、一番上のボタンがとれて、地面に落ちてしまった。店に入り、私がつさに必要としたものをカウンター上の若い青年に説明したが、彼は日本語でボタンは売っていないと返答した。再び私は「ボタンではなく、針と糸が必要です」と話したが、その返答は同じ響きだった。終いには、私が何と説明しようとも、その彼はアメリカ人が誰かに挨拶をする方法に似ていたが、「ハイ」と言っただけで終わらせてしまふのだった。私は辺りをうろつき、とある駄菓子屋に入った。必要なものを老婦人に説明すると、辛抱強く私の話を耳を傾けてくれた。すると箱から糸と針を取り出し、それを渡してくれた。私は財布を開けて値段を尋ねたが、その老婦人は私の申し出を断り、日本語で何か言った。それでも値段を尋ねたが、手を強く振られ、頭を撫でられた。その次の日にその店を通り過ぎたとき、店の老婦人は私を呼び止め、黒い糸を渡してくれた。「最初に渡した白い糸はコートの色に合わないで、使わないでくれ」と私に言ってくれたのではと思う。頭を再び撫でられたため、喜びのあまり感動し涙がこぼれ落ちた。「感情が通じれば、言葉は unnecessary だ！」と分かった。インド人の息子に愛情を注いだ日本人の母親の感情を理解するために、日本語を知る必要はない。私は、タゴールの詩の一節を思い出した。「主よ、汝は私を他人と親しくさせ、また私を理解するよう導き給うた」(寓喩のため訳例)。

(前海外客員研究員/訳 榎山貴史)